

## 青年の親に対する認知の重要性

### 青年期の親子関係研究及び親準備教育の観点から

広島国際大学心理科学部臨床心理学科 大島 聖美

要旨:本論文では、(1)青年期の長期化による親子関係の長期化と、それに伴う青年の自立の問題、(2)親子関係が青年の心理的諸側面に与える影響、(3)青年期における親子関係の発達、(4)青年期の親子関係と親準備性との関連について先行研究を概観した。ここから、青年期においても親子関係は重要なサポート源であること、青年の親もしくは親子関係に関する認知の重要性が示唆された。また、青年の親に関する認知は青年の親準備性と関連が深いことも示唆され、青年の心理的健康や発達を促進し、親準備性を高めるために、青年の親認知に注目した研究の必要性について議論した。

#### はじめに

近年の高学歴化や晩婚化という背景から、青年の経済的自立が遅くなり、青年が親からの経済的支援や心理的支援を受ける期間が長期化し、青年期が拡大したと言われている(笠原, 1976; 下山, 1998; 大野, 2001)。宮本・岩上・山田(1997)によると、1970年以降に青年期から成人期に至るまでの「成人期への移行」が長期化したことにより、「ポスト青年期」という新しいライフステージが誕生した。ポスト青年期とは、青年から成人への移行期に出現した新たなライフステージをさす。高学歴化で学卒時機自体が遅くなる傾向にあるが、学卒後も、経済的自立、離家、結婚など、成人への移行期に想定されている出来事経験が引き延ばされている状態を指す。

青年期の長期化によって、若者の親子関係も変化している。宮本ら(1997)は、若者の親子関係の長期化の背景として、親の若者に対する投資期間の長期化と投資量の増大を挙げている。そして、「親の愛情のあかし」という名のもとに、親から子への一方的な援助が増大し、子の役割や責任については問われない関係に陥っているために、親は子に自立した大人として生きていく力を与えることができているのではないかと考察している。「子のために」という長期的な援助が可能になった背景には、「子のためにすること」が親のアイデンティティになり他に生きがいが見つからないことや、夫婦関係の希薄さを補うために子育てに過度に没入するなどの心理的条件と、親に経済的余裕ができたという経済的条件の2つが揃ったことがある。その他、少子化、非婚化、親の長寿化と親側の親子同居願望、若者のリッチな生活指向と住宅事情(住居取得の困難さ)などが、親子双方に相互依存関係を求める気持ちを抱かせるという指摘もある(平石, 2006)。

若者の親子関係の長期化により、若者の自立をめぐる様々な問題が指摘されている。例えば、山田(1999)は学校生活を終え、社会人になりながらも親元から離れようとはせず、住まいや食事、その他日常生活の面で親に依存し続ける若者を「パラサイト・シングル」と呼んでいる。パラサイトで優雅な生活を送っているため、現在の生活水準を保証してくれる結婚相手を選ぶハードルが高くなり、なかなか結婚相手が見つからず、パラサイト生活が続くという。そして、日本におけるパ

ラサイト・シングルの成立条件の一つとして、「子どものためになんでもしようとする親」が増加したこと、しかし同時に諸外国と比べ「独立」を尊ぶ意識が形成される契機がなかったことを挙げている。

また、近年は引きこもりやニートの増加も深刻な社会問題として捉えられている。このような問題の背景として、雇用情勢の変化という経済的要因だけではなく、家庭が子の社会化を促す機能が弱くなっているなど、家庭や親子関係の要因も指摘されており、家族への支援や情報提供、相談が充実する必要性が高まっている（宮本, 2005）。

さらに、「一卵性母娘」と呼ばれる、一緒に出かけたり、洋服の貸し借りをしたり、恋愛談議に花を咲かせるなど、まるで双子や年齢の近い友達のように仲の良い母娘関係の存在も近年報告されている（柏木・大野・平山, 2006）。この仲の良い関係自体は悪いものではないが、例えば母親の娘に対する依存心が高すぎると、母親の依存心を敏感に感じ取った娘が母の期待に応えるいい子であろうとするあまり、様々な問題を抱えてしまうケースがあるという（信田, 2008）。

## 1 親子関係が青年の心理的諸側面に与える影響

### 1. 1 親の養育態度が青年の心理的健康に与える影響

青年期は学校の仲間など家庭外からの影響が大きくなる時期であるにも関わらず、人生の価値や目標、将来に関わる決定など長期的な問題には、両親がまだ主要な影響力を持つことがわかっている（Steinberg, 2008）。また、様々な研究が青年期においても、親の養育態度が青年の心理的健康に影響を与えることを示している。例えば嶋（1992）は、家族からのソーシャルサポートが女子大学生のストレス低減に寄与していることを示している。谷井・上地（1994）も、高校2、3年生の生徒とその両親を対象に、両親の親役割行動と子どもの学校適応感との関連を検討し、「受容」「適応援助」といった両親の支援的行動が、子どもの学校適応感に良い影響を与えることを明らかにしている。青年は緊急事態や人生の重要な選択場面では、親を必要とし続ける（Santrock, 2003）という指摘もあり、青年期においても親は重要な役割を担っていると言えるだろう。

これまでの親子関係研究では、親の養育を大きく2つの次元に分類している。一つの次元は子の行動面や心理面を管理する「統制」の次元であり、もう一つの次元は子に対する受容や感受性、親子間の情緒的な絆や愛着などの「情緒的な関係性」の次元である。子の行動を適度に「統制」することは、問題行動を低減することにつながり、子の社会性の発達や心理的成長にとって重要な役割を担うものである（Maccoby & Martin, 1983）。一方で、親による行動の統制はある時期までは若者のよりよい適応を助けるものであるが、その時期以降は青年のメンタルヘルスに影響を与えなくなるという研究モデルもあり、親による行動統制と子どもの適応の間には複雑で非直線的な関係性があることも示唆されている（Cummings, Davies, & Campbell, 2006）。他方、「情緒的な関係性」の次元は、青年まで一貫して直線的な影響があることが示唆されている。両親の受容や応答性といった「情緒的な関係性」が子の社会性や自己制御機能、向社会的行動、自尊心などを発達させ、反対にそのような「情緒的応答性」が欠けていると、将来の様々な不適応行動につながると言われてきた（Cummings, Davies, & Campbell, 2006）。

Baumrind (1991a) は親の養育態度を応答性 (responsiveness) と 要求性 (demanding-ness) の二つの次元の高低によって①権威ある親 (authoritative parents)、②甘やかしの親 (permissive or nondirective parents)、③権威主義的な親 (authoritarian parents)、④放任的な親 (rejecting-neglecting or disengaged parents) の4つの類型に分類している。権威ある親の養育態度とは、要求性と応答性共に高く、子どもの行動に対して明白な基準を伝えて要求するが、侵入的ではなく、罰よりも支持的なしつけ方略を用いるとされている。一方、甘やかしの親の養育態度は、応答性は高いが要求性は低く、子どもに成熟した行動を求めず、対決を避けているとされている。反対に権威主義的な親の養育態度は要求性が高いが応答性が低く、説明なしに子どもが自分達に従うことを期待しているとされる。放任的な親は要求性と応答性どちらも低いタイプで、子どもの監視も支持もせず、子育てをほぼ拒否している態度とされている。そして Baumrind (1991b) はそれらの親の養育態度と青年の有能感や自律性、社会性、問題行動との関連を検討し、権威ある親の子どもが最も望ましい特徴を多く持つことを示している。日本においても、辻岡・小高 (1994) が親子関係の類型に関わる情緒的支持、同一化、統制、自律性の4つの因子を抽出している。これらの四つの因子は受容の因子と統制の因子の2つの二次因子に集約されており、Baumrind (1991a) の要求性と応答性に類似した構造が見出されている。

以上のように、青年期においても、親の受容的・応答的な態度が青年の心理的健康によって重要であることが示されている。一方で青年期になると、親からの行動の統制は単純に適応を高めるものではないことが示唆されている。おそらく、それは青年の認知の問題と関わっていることが推測される。青年期は自立への欲求が高まる時期であり (平石, 2010)、親からの統制を的確なアドバイスと取るか、自立心を阻害するものとして取るかによって、青年の心理面に与える影響は大きく異なるだろう。

## 1. 2 青年期の親子コミュニケーション

Cooper, Grotevant, & Condon (1983) は個人化した (individuated) 青年の家族コミュニケーションの特徴は、「独自性」 (individuality: 自分の意見をはっきり伝え、他者と自分の意見の違いを表明すること) と「結合性」 (connectedness: 他者の意見に対して応答し、敬意を払うこと) のバランスが上手く取れていることだと述べている。平石 (2007) は、この Cooper et al (1983) のモデルに基づいて、独自性と結合性を測定する質問紙法による心理尺度を開発し、中学生から大学生までの年代の青年に対して調査を行っている。そして、中学生から大学生までに共通して、青年が親に対して独自性と結合性をバランスよく表明できることと、親子双方の関係においても、両者が相互的に独自性と結合性のバランスがとれたコミュニケーションを表明し合うことが、若者のさまざまな心理的適応の指標とよく関連していることを明らかにしている。

## 1. 3 青年の親に対する認知が親子関係に与える影響

青年が親にとって自分は重要な存在であると認識していることが、青年の内的・外的問題を減少させることが近年明らかになってきている (e.g., Schenck, Braver, Wolchik, Cookston, & Fabricius, 2009)。親側の要因だけではなく、子がしつけの意味をどう認知しているかということも、しつけの効果に影響を与える (柏木, 2003) という指摘もあり、今後は子側の養育に対する認知を考慮した

親子関係研究が求められる。渡邊・平石（2010）は、母親が継続的に理解・関心スキルを用いた関わりをすることが、子どもの母子相互信頼感に影響を及ぼし、間接的に子どもの心理的適応に影響を及ぼすことを示唆している。大島（2013a）の研究では、両親が評価した青年へのサポートと青年が評価した親からのサポートとの間の関連は薄く、青年の評価した親からのサポートのみが青年の心理的健康と関連することを明らかにした。また、島（2014）は、青年が親の養育態度をネガティブに評価していることが、不安定な内的作業モデルにつながり、内的作業モデルが不安定であることが社会的適応を困難にすることを明らかにしている。ここから、養育行動は親から子へという一方向的なものではなく、子から親へという方向性や、子が養育行動をどのように認識しているかという子側の捉え方という観点が重要になると考えられる。

## 2 青年期の親子関係の発達

青年期の親子関係の発達はどのような順序を辿るのだろうか。Blos (1971) によると、青年期前期では親からの分離が始まり、親との間に距離を取り始めたり、親に反抗したりするが、次第に親からの分離が進むと親を客観的に見られるようになり、青年期後期には親との対話がなされ、若い成人期とも呼ばれる後青年期では親との和解が発達課題の一つとされている。

Josselson (1973)は、若者が親から自立していく「分化」のプロセスを二段階に分類している。第一段階は、「練習」と定義され、青年期前期によく見られる、権威ある人物像として影響力のある大人を単純には受け入れなくなることが特徴である。青年期中期になると、「再接近（和解）」と呼ばれる、分化の第二段階を経験する。この時期の子ども達は、親への過度の依存状態に逆戻りすることへの脅威は減少したと自覚しつつ、親からの自立と親との絆とをよりしっかりしたバランスのとれたものにするに、再度取り組む。

White, Speisman,& Cotos (1983) は、青年期から初期成人期までの両親（主に母親）との関係の発達プロセスを大きく6つの段階に分けている。①まず初めは若者が親から分離した自己を強調し、自分は正しく先進的で、親は間違っていて、遅れているとみなす。②次に若者は親子関係において自分が何らかの寄与をしていると気づき、③親の立場に立って物事を見ることができるようになり、④両親が自分達を個人としてどのように見ているかがわかるようになり、親側も子どもがアドバイスやケアができ、自分自身の意見を持っていることを理解できるようになる。⑤親子共々お互いを個人として認識し、仲間のような相互性を示すが、まだ表面的な段階から、⑥完全に仲間のような相互性を示す段階に至るとされている。そして22～26歳の若者にインタビュー調査を行ったところ、年齢が高くなるほど、親子関係の段階も進むことを示している。Feldman & Gehring (1988) の研究によると、家族メンバーの心理的距離は、加齢に伴って増大し、反対に親子間の力の差は、加齢に伴って小さくなる傾向が認められた。

日本の研究においても類似した結果が示されている。西平 (1990) は子の親離れを心理的離乳と呼び、第一次離乳から第三次離乳までの3ステージがあると想定した。第一次離乳は反発や反抗を主たるエネルギーとしたもので、親への依存を打ち消すことがねらいであるが、そのために苛立ちと不安を強め、不信と攻撃性を強めていく悪循環である。第二次離乳は、高校生から大学生あたり

に見られるもので、他罰的・理想主義的な極端さが減って親側の事情も汲むなど、現実的なレベルで親と異なる意見を抱くことができるようになる。第三次離乳はやや特別なもので、親子関係の葛藤が特に深かった一部の若者達が体験するもので、両親から与えられ内面化された、モラルや価値観を超越して、本来の自分らしい生き方を確立することを指す。落合・佐藤 (1996) の中学生から大学院生までを対象にした心理的離乳に関する質問紙調査では、親子関係が①親が子を抱え込む関係及び親が子と手を切る関係、②親が子を危険から守る関係、③子が困ったときには親が支援する関係、④子が親から信頼・承認されている関係、⑤親が子を頼りにする関係の5段階の過程を経ることを示唆している。

久保田 (2009) も、青年期 (中学生と大学生) の親子関係の発達的变化を会話分析の観点から比較している。ここでは、研究対象者である母娘は、論理的な思考や議論が必要となる算数課題と、異なる大きさと色のミラーに異なる形と色のストーンをデザインしていくという親子で共に行う作業に取り組み、その課題に取り組む際の親子の会話内容が分析された。その結果、中学生の方が大学生よりも自分の要求や主張をはっきり述べ、逆に大学生は中学生よりも、母親の意見を尊重しようとする発言が多くなっていた。また、中学生の母親は大学生の母親よりも子どもが意見を言いやすいように提案したり、子どもが求める要求に応じたりする傾向が見られた。また、片岡・園田 (2010) は、青年期に起こる愛着対象の移行を検討した。その結果、高校生に比べて大学生では親が愛着対象として選択されることが多く、青年期中期の若者は親から分離しており、青年期後期の若者は親を再び愛着対象として見直しているという可能性を示唆している。

しかしながら、親子関係の発達がどのような要因によって促進されるのかに関しては、未だ不明確である。また、当然ながら、若者側の認識する親子関係の発達に伴い、親側の親子関係に関する認識も変化する。杉村 (2011) はこれまでの研究から、青年期後期の発達の方向は親からの情緒的な独立という「自律性」の獲得に向かい、子の自律に向けた変化に伴って親の視点や行動が変化し、親子の再編がなされることは明らかとなっているが、再編の詳細についてはほとんど検討されていないと述べている。

そこで大島 (2013b) は、青年期の親子関係が発達していくプロセスを明らかにするために、インタビュー法を用いて検討したところ、青年側から見た親に対する認識の変化は次の3段階を経ることが明らかとなった。第一段階は、「親の視点に立つ」ことで、これは両親の夫婦関係を見る中で親の過去や新たな一面を見出したり、自分が親になった時のことを想像したりすることによって促されるものである。第二段階は、「親を捉え直す」段階であり、「親の視点に立つ」ことによって、これまでの親に対する見方を変化させ、親への感謝や尊敬といった気持ちが高まると同時に、親も自分と同じ一人の人間なのだという気づきを得る。第三段階は、「親へのイメージを統合」する段階であり、第二段階で捉え直した親を新たに自分の中で統合し、親の欠点を受容するとともに、親も共に成長している存在であると認識し、親を一つの生き方のモデルとして受け入れる段階である。このように、「親の視点に立つ」という青年の認知的変化が、親に対する尊敬や愛着を高め、それが若者の心理的健康の高さにつながることが推測される。

### 3 青年期の親子関係と親準備性との関連

上記では、青年期の心理面における親子関係の重要さと、青年期の親子関係の発達について先行研究を概観した。この概観から、青年期の心理面において特に重要なのは「青年が親（親子関係）をどのように認知しているか」であり、その認知は青年の成長とともに発達していくことが示唆された。

この青年の親に対する認知は、青年の心理的健康を促進するだけではなく、青年の親準備性とも関連すると考えられる。親準備性とは、「青年期における『親』の準備状態を意味する語であり、将来の家庭生活とそこにおける育児行動を子どもの成長にとってより望ましい健康なものにする」性質である（井上・深谷, 1983）。岡本・古賀（2004）は、親準備性が高い群の方が、青年の父親イメージ・母親イメージが良いことを示唆している。

従来から生育歴、特に自身が親からどう育てられたかは、その人の養育態度に影響することが指摘されてきた。柏木（1995）は、養護性がその人自身の成長過程で受けた養護経験と結びついていることから、良い親子関係が良い親を育てると述べている。氏家（1995）は、子ども時代の母親についての記憶と母親としての態度の関連性を検討し、子ども時代の母親のイメージが肯定的な母親は、否定的または中間的なイメージをもつ母親よりも、母親としての肯定的態度を有していることを見出している。野末（2008）は、子育てにおける男性の「自分が子どもの面倒を見たら、何か大変なことが起こるのではないか」、「女性は、男性よりも生まれつき養育的だ」などの恐れと思い込みは、その男性の子ども時代の家族体験、とりわけ父親との関係が大きな影響を及ぼしていると述べている。

一方で、親の被養育体験が、そのまま現在の養育に影響するわけではないという指摘もある。Parke（2002）は様々な文献を概観し、自分の父親によく関わってもらった男性（父親）ほど子どもによく関わるということをサポートする研究がある一方で、自身の父親との関係は良くなかったと捉えている男性（父親）ほど子どもによく関わるという研究もあることから、両者は矛盾しないと述べている。なぜなら、男性は現代の父親という自分達の世代と、過去の父親という前の世代から、父親に関するモデルを描き出すからであると言う。そして男性が父親になろうとする時、彼らは父親の行動に関する過去と現在のイメージの調停をしようとするとして述べている。同様のことが母親についても言える。大島（2013c）の中年期の母親の子育て体験による成長過程に関する研究では、母親は自身の子どもの頃の体験の他に育児書等の社会的に構築された母親モデルの影響を受けつつ、理想の母親像を自らの中に作り出していくことを示唆している。

ここで重要なのは、父親・母親ともに、自らの被養育体験がそのまま養育行動に影響するわけではないことである。そこには、自らの価値観や視点という認知が介在している。そして、認知は社会の中にある多様な価値観から影響を受けるのだが、そのような価値観を選択・統合し、新しい父親像・母親像を作り出すのは、これから親になる青年自身である。

### 4 まとめと今後の課題

本論文では、(1) 青年期の長期化による親子関係の長期化と、それに伴う青年の自立の問題、(2)

親子関係が青年の心理的諸側面に与える影響、(3) 青年期における親子関係の発達、(4) 青年期の親子関係と親準備性との関連について概観した。ここから、二つの重要な視点を得ることができた。

一つ目は、青年期においても親子関係は重要なサポート源であることである。前述したように、先行研究から、親の養育態度が青年の心理的健康に影響を与えていることが示された。特に青年期においては、行動の統制よりも受容や絆、愛着などの親との「情緒的な関係性」が重要であることが示唆されている。青年期の親子コミュニケーションに関する研究においても、情緒的関係性と関連の深い「結合性」は重要であり、この「結合性」と自分の意見を言えるなどの「独自性」とのバランスが重要であることが示唆されている。また、青年期における親子関係の発達に関する先行研究から、青年期後半になるほど親子関係が仲間のような関係になっていくことが明らかになっている。ここからも、青年は親との情緒的に良好な関係を維持しながら、自立を獲得していくことが窺える。

二つ目は、青年の親もしくは親子関係に関する認知の重要性である。なぜ青年の親に関する認知が重要であるかという点、一つは青年の心理的健康や心理的発達に直接的な影響を及ぼすからである。前述の先行研究で示されたように、特に青年期においては、親の養育態度が直接青年の心理的健康に影響を与えることはまれで、その間に青年の親の養育態度に対する認知という媒介変数が存在することが多い。つまり、実際の親の養育態度よりも、青年が親をどのように捉えているか、評価しているかといった、子の親イメージが青年の心理的健康に直接影響を与えるのである。また、青年の親に対する認知は、青年の親子関係にも影響を与える。これまでの親子関係研究に対する反省点の一つとして、子どもから親への影響に関する研究が乏しいことが指摘されている(Cummings, Davies, & Campbell, 2006)。特に青年期には、第二反抗期に代表されるように、青年が自らの意思を主張することが多くなるため、青年から親への影響は大きくなると考えられる。青年期における親子関係の発達に関する研究においても、青年の変化が先にあり、それと連動して親側の変化が生まれることが窺える。そして、親側の変化がまた青年の変化に影響を与えるというように、青年の親に対する認知の変化は、青年の親子間コミュニケーションにも影響する。

もう一つは、青年の親に関する認知は青年の親準備性と関連が深いからである。近年の少子化、児童虐待の増加等の背景から、親になる準備教育の必要性が指摘されている(松下・奥谷, 2014)。後藤・奥田・平岡・呉・大森・前田(2010)の研究によれば、大学生の多くが「親になるつもりがある」と回答するが、それと比較して「親になる自分を想像できる」、「親になる自信がある」と回答する学生は少ないという。親準備性に関する先行研究は、親準備性が家庭での手伝い体験や子ども・高齢者とのふれあい体験等、いくつかの要因から形成されることを示唆しているが、青年の母親イメージや父親イメージも依然として重要な要因であることを示唆している(e.g., 岡本・古賀, 2004)。そのイメージは肯定的なものである方が望ましいが(e.g., 氏家, 1995)、必ずしも肯定的なものである必要はない。なぜなら、青年は親の行動に関する過去と現在のイメージの調停を行い、新しい親像を作り上げていくからである(Parke, 2002)。

以上より、青年の心理的健康や発達を促進し、親準備性を高めるために、青年の親認知に注目し

た研究が今後必要である。青年は親子関係のどのような要素から、親に対する認知を形成していくのかについても、詳細な研究が求められるだろう。また、先行研究から、青年の親に対する様々なイメージを統合し、青年の中で親との関係に一つの区切りをつけることは、青年期の親子関係の発達地点であり、新しい親像を青年自身の中に形作っていくために、大変重要であると考えられる。しかしながら、この点に注目した親準備教育プログラムは、現時点では見当たらない。藤後(2004)は、「個人として主体的に生きること、社会との関係をもち、問題をとらえていくという視点からペアレンティング教育についても考えていく必要がある」と述べている。その一つの視点が、青年の現在の親との関係を振り返るということではないだろうか。今後、生育歴や現在の親子関係に焦点を当てた親準備教育プログラムの構築が期待される。

### 引用文献

- Baumrind, D. (1991a). Parenting styles and adolescent development. In R. M. Lerner, A. C. Petersen, & J. Brooks-Gunn (Eds.), *Encyclopedia of Adolescence* vol. II. NY: Garland Publishing.
- Baumrind, D. (1991b). The influence of parenting style on adolescent competence and substance use. *Journal of Early Adolescence*, 11, 56-95.
- Blos, P. (1971). *On adolescence : A psychoanalytic interpretation*. NY: Free Press. 野沢英司(訳). (1971). 青年期の精神医学. 東京: 誠信書房. (Original Work published 1962).
- Cooper, C. R., Grotevant, H.D., & Condon, S. M. (1983). Individuality and connectedness in the family as a context for adolescent identity formation and role-taking skill. *New Direction for Child Development*, 22, 43-59.
- Cummings, E.M., Davies, P.T., & Campbell, S.B. (2006). *Developmental psychopathology and family process: Theory, research, and clinical implications*. NY: The Guilford Press. 菅原ますみ(監訳). 発達精神病理学—子どもの精神病理の発達と家族関係. 京都: ミネルヴァ書房. (Original Work published 2002).
- Feldman, S. S. & Gehringer, T. M. (1988). Changing perceptions of family cohesion and power across adolescence. *Child Development*, 59, 1034-1045.
- 後藤さゆり・奥田雄一郎・平岡さつき・呉宣児・大森昭生・前田由美子. (2010). 青年期における「親になること」の教育的意義の検討. 共愛学園前橋国際大学論集, 10, 207-218.
- 平石賢二. (2006). 青年期の親子関係の特徴. 白井利明(編). よくわかる青年心理学 京都: ミネルヴァ書房.
- 平石賢二. (2007). 青年期の親子間コミュニケーション. 京都: ナカニシヤ出版.
- 平石賢二. (2010). 第三章青年期の親子関係. 大野久(編) エピソードでつかむ青年心理学 京都: ミネルヴァ書房.
- 藤後悦子. (2004). 青年期を対象としたペアレンティング教育の導入: アメリカのペアレンティングプログラムの例. 日本家庭科教育学会誌, 47, 248-254.
- 井上義朗・深谷和子. (1983). 青年の親準備性をめぐって. 周産期医学, 13, 2249-2252.



- Josselson, R. L. (1973). Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of youth and adolescence*, 2, 3-52.
- 笠原嘉. (1976). 今日の青年期精神病理像. 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦 (編) 青年の精神病理 1. 東京: 弘文堂.
- 柏木恵子. (1995). 親の発達心理学. 東京: 岩波書店.
- 柏木恵子. (2003). 家族心理学: 社会変動・発達・ジェンダーの視点. 東京: 東京大学出版会.
- 柏木恵子・大野祥子・平山順子. (2006). 家族心理学への招待: 今, 日本の家族は? 家族の未来は? 京都: ミネルヴァ書房.
- 片岡祥・園田直子. (2010). 青年期に起こる愛着対象の移行における親の位置づけ. 久留米大学心理学研究, 9, 1-8.
- 久保田桂子. (2009). 青年期の母娘関係の発達差: 会話分析による青年期前期と後期の交流の比較. 心理学研究, 79, 530-535.
- Maccoby, E., & Martin, J. (1983). Socialization in contexts of the family: Parent-child interaction. In E. M. Hetherington (Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 4. Socialization, personality, and social development* (4th ed., pp.1-101). NY: Wiley.
- 松下優子・奥谷めぐみ. (2014). 大学生の自立意識調査から見える親になる準備教育の必要性. 福岡教育大学紀要, 63, 173-180.
- 宮本みち子. (2005). 家庭環境から見る. 小杉礼子(編). フリーターとニート. 東京: 勁草書房.
- 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘. (1997). 未婚化社会の親子関係: お金と愛情にみる家族のゆくえ. 東京: 有斐閣.
- 西平直喜. (1990). 成人になること: 生育史心理学から. (人間の発達4) 東京: 東京大学出版会.
- 信田さよ子. (2008). 母が重くてたまらない: 墓守娘の嘆き. 東京: 春秋社.
- 野末武義. (2008). 乳幼児を育てる段階. 中釜洋子・野末武義・布柴靖枝・無藤清子. 家族心理学: 家族システムの発達と臨床的援助. 東京: 有斐閣ブックス.
- 落合良行・佐藤有耕. (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳. 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 岡本祐子・古賀真紀子. (2004). 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析. 広島大学心理学研究, 4, 159-172.
- 大野祥子. (2001). 青年期の長期化と親への依存. 柏木恵子・伊藤美奈子(編). 女性のライフデザイン  
の心理①. 東京: 大日本図書
- 大島聖美. (2013a). 夫婦間の信頼感と両親からの支持的関わりが若者の心理的健康に与える影響の  
男女差. 発達心理学研究, 24, 55-65.
- 大島聖美. (2013b). 青年期の家族関係: 父・母・若者それぞれの心理的成長. お茶の水女子大学博  
士論文.
- 大島聖美. (2013c). 中年期母親の子育て体験による成長の構造. 発達心理学研究, 24, 22-32.
- Parke, R. D. (2002). Father and families. In M.H. Bornstein. (Ed.), *Handbook of parenting* vol.3 (2nd ed.,  
pp.27-73). Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.

Santrock, J. W. (2003) *Adolescence* (9th Ed.) Berkshire:McGraw Hill.

嶋信宏 (1992) 大学生におけるソーシャルポジティブな関わりの日常ストレスに対する効果 社会心理学研究, 7, 45-53

島義弘. (2014). 親の養育態度の認知は社会的適応にどのように反映されるのか：内的作業モデルの媒介効果. 発達心理学研究, 25, 260-267.

Schenck, C., Braver S. L., Wolchik, S. A., Cookston, J. T. & Fabricius, W. V. (2009) Relations between mattering to step – and non-residential fathers and adolescent mental health. *Fathering*, 7, 70-90.

下山晴彦. (1998). 第7章青年期の発達 下山晴彦(編). 教育心理学Ⅱ：発達と臨床援助の心理学. 東京：東京大学出版会.

Steinberg, L. (2008). *Adolescence* (8th Ed.). Berkshire:McGraw Hill.

杉村和美. (2011). 第Ⅱ章親子関係の生涯発達心理学3. 青年期. 氏家達夫・高濱裕子(編著). 親子関係の生涯発達心理学. 東京：風間書房.

谷井純一・上地安昭 (1994) 高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 教育心理学研究, 42, 185-192.

辻岡美延・小高恵. (1994). 小・中・高校生における親子関係の認知構造の発達. 関西大学社会学部紀要, 26, 65-84.

氏家達夫. (1995). 子ども時代の母親についての記憶が母親としての態度に及ぼす影響について. 母性衛生, 36, 173-180.

渡邊賢二・平石賢二. (2010). 母親の養育スキルと子どもの心理的適応に関する縦断的検討. 家族心理学研究, 24, 171-184.

White, K. M., Speisman, J. C. & Costos, D. (1983). Young adults and their parents: Individuation to mutuality. In H. D. Grotevant & C. R. Cooper (Eds.), *Adolescent development in the family*. *New Direction for Child Development*, 22, 61-76.

山田昌弘. (1999). *パラサイト・シングル*の時代. 東京：筑摩書房.